

第6回 徳島県・にし阿波の傾斜地農耕システム 前編

ススキが守る傾斜地農耕

集落を守るのはイノベーター農家

急傾斜地に張り付くように集落が点在する天空の郷。作物、農法、生活、文化が自然に溶け込み、生物多様性も宝庫だ。人間の知恵を集めた農法で400年以上の歴史があるが、いま集落は消滅危機に見舞われ、イノベーター農家だけが残っている。次世代に如何にして引き継ぐか。

1

傾斜地農法は人間の知恵の結集

西日本第2位の高峰を誇る剣山（1955m）の北斜面に広がる徳島県「にし阿波」地方の集落を訪ね歩いた（2021年11月初め）。徳島の平野部に住む人々から「ソラ」と呼ばれてきた山間部である。〴〵傾斜地農法であり、古代から続く〴〵独特の農法が人々の生活を支えている（写真1）。

人々は山の斜面に住んでいる。標高100～900mの山間地域に200近くの集落が点在している。集落は傾斜地にあり、独特の景観が見られる。吉野川はよく氾濫する暴れ川であるため（年1、2回氾濫）、安全上、住居は高いと

ころにある。山上付近でも水が湧き出るため、高いところが上等な土地という評価である。町の中は2等地、山の上が1等地とも言われる。

カヤ利用と独特の生産方式

畑は、山間部によく見られる棚田や段々畑（これらは水平面に造成）ではなく、傾斜地のまま農業を行なっている（〴〵傾斜畑）。傾斜40度の畑もある。そのため、農法や農具が独特である。

「等高線農業」はその典型であるが、畝の切り方に知恵を使っている。

例えば、水をあまり必要としな

いサツマイモは、畝を傾斜に対して垂直に作り、水を流している。

一方、水が必要とする作物は傾斜に対して等高線のように土を盛り上げ畝を作り植え付けする。さらに、畝間にカヤ（ススキ）を敷いて保水力を高めている。作付けする作物によって畝の作り方を工夫している。農具も傾斜畑に適する独特なものが工夫されている（後述、次号第4節）。

また、カヤを使って、傾斜畑の土壌流亡を防いでいる。カヤを乾燥させるために束ねて円錐状に積み上げた「コエグロ」があちこちに見える（写真2）。当地方独特の景観であり、秋から冬にかけての風物詩である。

このカヤは、春になると肥料と

叶 芳和

1943年、鹿児島県奄美大島生まれ。一橋大学大学院経済学研究科博士課程修了。元国民経済研究協会理事長。拓殖大学、帝京平成大学、日本経済大学大学院教授を歴任。主な著書は『農業・先進国型産業論』（日本経済新聞社1982年）、『赤い資本主義・中国』（東洋経済新報社1993年）、『走るアジア遅れる日本』（日本評論社2003年）、『新時代の農業挑戦』（全国農業会議所2014年）など。



して畑に入れられる。地温調節効果もある。カヤで畑の表面を被うと、昼の温度上昇を防ぎ、夜は保温効果がある。

傾斜畑で作っている作物は〴〵雑穀である。在来種のソバ、ヒエ、アワ、キビ、モロコシ、小豆、大豆などだ。もちろん、大根など野菜もある。人々はこれで自給自足の生活を営んできた。昭和の初期までは焼き畑が行なわれていた。車で走ると、道路際まで収穫期を迎え真っ黄色になったユズが鈴なり。柿も多い。にし阿波の特産物だ。歴史的には、この山間部に、縄文時代から人が住んでおり、焼き畑で社会を形成していたとみられている（3000年前の縄文土器が発見されている）。平家落人伝説

も残る。ただ、役場等に残る文献で確認できるのは400年前であるので、「400年以上続く農業」とされている（注…「阿波学会紀要」第57号所収等の諸研究によると、集落は南北朝時代、つまり600年以上前から形成されていたようだ）。

世界農業遺産登録

この傾斜地農業ではカヤが最重の資源になっている。定期的に刈り採られているため、日当たりの良い環境でしか生育できない植物など多様な植物が採草地に存在し、多くの昆虫や、その昆虫を餌

とする鳥類や爬虫類など様々な動物も生育している。採草地が希少な動植物の生息環境を提供し、生物多様性の宝庫になっている。世界的にミツバチの減少が問題になっているが、当地域ではニホンミツバチで養蜂が行なわれている。

また、景観が旅情をそそる。山腹の傾斜地に張り付くように点在する集落は、まさしく「天空の郷」である。作物、農法、生活、文化が自然に溶け込み、まさしく大地に刻印された歴史的空間であり、悠久の歴史を想わせ



写真1：傾斜地農業（つるぎ町剪宇集落）



写真2：コエグロの風景（つるぎ町明谷集落）

る。この地域独自の景観だ。世界農業遺産は景観が一つの認定基準であるが、今日まで見てきた世界農業遺産の景観の中でも、ここは阿蘇草原に並ぶ一歩独特な景観である。

このように、にし阿波の傾斜地

は、食と暮らしを支え、知恵や文化、景観、生態系を残している。こうしたことが評価され、2018年に、国連食糧農業機関（FAO）より、「世界農業遺産」に認定された。次世代に継承すべき伝統的な農耕システムと評価されたわけだ。

システム名は「にし阿波の傾斜地農耕システム」。認定地域は美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町の2市2町である。人口は7万人超（2020年国勢調査）。

しかし、この世界遺産は、山間部集落が消滅危機に陥っている。人口の減少だけではなく、農地も消滅している。傾斜畑面積は、1960年には3000haを超えていたが、現在は1000haを切っている（徳島剣山世界農業遺産推進協議会調べ）。集落を去る人々が、地域を離れる際にスギ等を植林しているからだ。にし阿波世界農業遺産は厳しい現実に向き合っているといえよう。

2

持続的農法は残るも、集落危機

四国（徳島）を訪れたのは15年ぶりである（前回は上勝町、2006年1月）。徳島は心なしか元氣

がないように思えた。吉野川沿いを走るJR徳島線は車両3両であった（1、2両が多いという）。地

表1：つるぎ町（旧町村別）の人口推移（単位：人、％）

	旧一宇村	旧貞光町	旧半田町	つるぎ町
1955	(1,491) 7,710	11,170	12,464	31,344
1960	(1,437) 7,069	10,747	11,459	29,275
1970	(1,242) 5,092	8,812	9,406	23,310
1980	(967) 2,929	8,013	7,915	18,857
1990	(854) 2,124	6,899	6,771	15,794
2000	(698) 1,547	5,963	5,590	13,100
2010	(496) 919	5,098	4,473	10,490
2015	(400) 702	4,428	3,797	8,927
2020	(…) 512	3,894	3,309	7,715
1990/1960	-70.0	-35.8	-40.9	-46.0
2020/1990	-75.9	-43.6	-51.9	-51.2

出所：国勢調査。
旧一宇村の()内は世帯数

方と東京の格差というより、時間が止まっているように感じた。「自然に近い場に來たのかもしれない。実感を検証するため、統計を見た。表2に示すように、にし阿波地区（2市2町）の人口は、1960～90年の30年間で36％減少した。続く90～2020年の30年間で35％減少した。徳島県全体より

表2：にし阿波地域の人口推移（単位：人、％、県は千人）

	つるぎ町	美馬市	三好市	東みよし町	2市2町	徳島県
1950	32,112	63,898				879
1960	29,275	55,930	71,370	20,400	176,975	847
1970	23,310	44,798	55,537	16,176	139,821	791
1980	18,857	41,642	47,057	15,610	123,166	825
1990	15,794	39,159	42,219	15,908	113,080	832
2000	13,100	36,632	37,305	16,199	103,236	824
2010	10,490	32,484	29,951	15,044	87,969	785
2020	7,715	28,055	23,605	13,602	72,997	720
1990/1960	-46.0	-30.0	-40.8	-22.0	-36.1	-1.9
2020/1990	-51.1	-28.4	-44.0	-14.4	-35.4	-13.5

出所：国勢調査

も、人口減少が激しい。その徳島県は四国全体より人口減少率が大きく、四国は九州より人口減が大きい。中でも、つるぎ町の人口減少が激しい。にし阿波世界農業遺産の中心地の実態だ。つるぎ町は平成17年（2005年）に、旧一宇（「いちゅう」とも発音）村、旧貞光町、

旧半田町が合併して誕生したが、特に旧一宇村の人口減少が激しい。一宇村は山間部の急傾斜地に集落があり、村を去る人が多かったからだ。高度成長期よりも、その後の方が人口減少率が高い。出稼ぎによる流出よりも、生活の利便性を求めている山間地脱出であろうか。いまや数軒からなる「限界集落」が多い。後述するように、後継者がいて将来も集落に残りそうな家は1軒という集落が多い。しかし、その1軒は、いずれもイノベーター農家だ。経営にイノベーションがみられる。興味深い。世界農業遺産に認定されているように、この地域の農業は「持続的農法」が採られている。しかし、農業を営む集落は消滅の危機にある。持続的農法を採っても、農業を営む集落生活は消えていく。次世代への継承は難しい。世界農業遺産認定の意義は何か。農法は持続、集落は消滅危機（つまり持続的ではない）、この解はどこに求めるか。世界農業遺産のオープンデートルが問われているのか、それとも、世界農業遺産認定がこの集落危機を脱するのに役に立つのであろうか。今回の取材、現地ルポの宿題は重い。

つるぎ町立貞光小学校5年生教室で、役場の担当者から世界農業遺産の「出前授業」があった。「総合的学習」の一環である（5年生17人対象）。ススキやヒエ、アワ等雑穀の実物を示しながら、持続可能な農業について説明、子供たちが地域への誇りや愛着を深めることが期待されていた。出前授業はSDGs教育である。世界農業遺産の目的は次世代への継承であるから、一世代先の担い手づくりだ。子供たちに好評だった。

終わって、校長の永井康彦先生に、農法の持続性と集落消滅の矛盾という現実をどう学習するかについて質問した。永井先生「集落を残そうという視点はない。子供たちが誇りをもち、アイデアを出して生きるように教えているという。子供たちの夢は何か聞いた。かつては野球選手やパイロットだったが、今はSNSの影響か、ゲームプログラマー等の声が挙がるようだ。

（次号に続く）

前号の修正

48頁2段目、中坊真さんの発言は「阿蘇では野草といえ、ススキだ。ススキの効用については大学など様々な研究機関から報告が出ている」に修正。